

2012年4月12日(木)

医療福祉ジャーナリズム特論 大熊由紀子教授

「差別と格差のない社会を目指して」

2A08007 浅野泰世

「自分の抱えている問題について話し、それを通じて、行政官とはどういうものか、逆にジャーナリストはどうか、考えていただく素材になるのがよいと思う。」このように述べて、山崎さんは講義を始められました。

講義を聞き終えて、私の行政官=官僚に対して抱いていたイメージは大きく変わりました。

官僚は「権力」を希求しそれを行行使する人々？

「官僚」から連想する言葉は「権力」でした。講義の中でもたびたび使われた「縦割り」とは、官僚が自ら手にした「権力」を手放さないことから生まれる弊害で、多くの問題を抱えた社会がなかなか変れないのはその弊害のためだと思っていました。

「民主主義は、全部違う国民がいて、50対49だったら一票の差で勝ちますよ。でもみんな違う。それは49人と49人を説得して、納得してもらわなければならない。上から決めてはいけない。」

納得のための労力と時間を、民主主義を維持するためのコストとして引き受けるのが官僚であると、山崎さんの言葉は教えてくださいました。

制度・政策は机上の空論？

現場を知らない官僚が机上で作る制度や法律が現場を混乱させ、生活を悪くするという話を度々耳にし、そういうものだと思い込んでいました。

講義で話された「生活困窮者支援体系—7つのポイント」は、最後のセーフティーネットである生活保護の前に、困窮者を再び私たちの社会に向かえ入れる方策を述べたものでしたが、その根拠として述べられたのは、生活の場における困窮者の置かれた具体的な状況と、そのような状況を何とかしようとする努力している人々の活動とその成果でした。現場に根差し、現場を信じるところから制度・政策が生み

出されていることがよくわかりました。

官僚の話は解りにくい（官僚はわざと一般市民がわからないような話し方をする）？

講義の資料として、反貧困ネットワーク事務局長で、内閣参与も務められた湯浅誠の記事が紹介されました。マックス・ウェーバーの引用で始まるその論考は、難しいだろうな～と思って読んだら、やはりとても難しいものでした。これに対して、山崎さんが会場の質問に答え、水戸黄門から始められたお話は、とても解りやすいものでした。私の理解が間違っていなければ、両者はともに、私たちが住む社会をどのようなものにするかを決める責任は、「生活の場」にいる私たちが負っていて、その結果を引き受けるのも私たちだと言っているのだと思いました。

NHKの番組と山崎さんのメッセージ

NHKスペシャル「生活保護 3兆円の衝撃」を見たときに、製作者の意図がいかなるものであっても、私たちの心の奥にある排除や差別の感情を代弁してしまっていると感じました。というのは、あの番組を見たとき心の奥に、頭で考えていることとは裏腹に、そこに描かれた人びとを社会に甘えた人と感じている自分を見たからです。山崎さんは、介護保険を、「負担とサービスのバランスを、介護を受けていない人も納得してもらわないと、基盤が崩れてしまう弱いものだ」とおっしゃいました。とすれば、山崎さんがこれから創ろうと考えていらっしゃる社会の新たなセーフティーネットは、私たち一人一人が、心の奥にある差別と排除の感情を克服しなければ、うまく機能しないのではないのでしょうか。

「この生活保護の問題は、ほかの福祉にはない、非常に重要な問題だと思います。マスコミの方を含めて、この社会をどうするのか、分断社会、格差社会を本当につくるのか、たまたまそうなった人たちが、社会的包摂によってもう一度立ち直るのをやるか、本当にここは考えなければいけない。」多くのことを学ばせて頂いた講義のお礼に変えて、この言葉を深く心に刻みたいと思います。